

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12594

研究課題名（和文）近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 伊勢大神楽と韓国農楽を中心に

研究課題名（英文）Modern Changes of House Purifying Performing arts in Japan and Korea: Mainly Focused on Japanese Ise-daikagura and Korean Nong-ak

研究代表者

神野 知恵 (KAMINO, Chie)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20780357

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：2020年からのコロナ状況下で、調査・研究ができない期間があったが、その後延長したことにより日本と韓国の様々な門付け芸能および家々を巡って行われる民俗行事について広く研究することができた。とくに伊勢大神楽の回檀の現状について重点的に調査を行った。なかでも戦後に廃業した伊勢大神楽の社中が回檀先の地域に残した文化的な影響に注目し、インタビューや文献調査を通じて検討した。それらの研究成果は、写真展示や映像民族誌の制作およびその上映イベントを多数行って一般公開に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家を廻る専業の芸能集団の多くが戦後に廃業したが、伊勢大神楽や徳島県の木偶まわしは現在回檀の活動を続けている。彼らは、芸能者が本来担ってきた宗教・民間信仰的な機能を教えてくれる貴重な存在である。本研究で近現代の伊勢大神楽の回檀文化の変遷を通じて、「家」という空間が持つ意味の変化を知ることが出来た。また韓国の農楽との比較により、東アジアの文化的共通性を探ることができた。

研究成果の概要（英文）：Although there was a period of time when research and study was not possible due to the corona situation from 2020, it was later extended, allowing for extensive research on various Japanese and Korean performing arts visiting houses. In particular, the project focused on the current state of Ise Daikagura's custom of visiting houses. The focus was on the cultural impact of the Ise Daikagura company, which went out of business after World War II, on the communities in which the company performed, through interviews and a literature survey. The results of this research were exhibited to the public through photo exhibitions, the production of an ethnographic film, and a number of events to show the film.

研究分野：民族音楽学

キーワード：伊勢大神楽 門付け 家廻り芸能 民俗芸能 農楽

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では古来より、萬歳、猿廻し、瞽女など様々な専門芸能者による「門付け」の芸能が伝承されてきた。彼らは、家々を廻って門口に立ち、その家の厄祓いや商売繁盛を願って、歌舞音曲などの芸能を奉納・披露することを生業としてきたが、その多くは第二次世界大戦以降の高度経済成長期の影響を受けて廃業した。現在では年間を通じて広域で巡行を続け、それにより生計を立てている団体は「伊勢大神楽」が唯一だといえる。一方、韓国にも専門芸能者による門付けの芸能があったが、やはり差別や経済的な問題、娯楽の多様化などの波を受けて衰退し、現在門付けを主な収入源とする団体は存在しない。しかし、地域住民による農楽や民謡などの芸能のなかには、専門芸能集団から影響を受けたことが語られる事例が複数見られる。そこで本研究では、近現代日本・韓国における専門芸能集団による門付け芸能を比較研究し、両文化圏において門付け芸能が担ってきた役割や存在意義の変化を考察することを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、近現代日本と韓国において、門付け芸能が持つ意味がどのように変化してきたか、または維持されてきたのかについて考察することを目的とした。とくに以下の観点から検討した。

- ・戦争を挟んで門付け芸能が衰退した時期、原因、復興の経緯
- ・専門集団における担い手の継承システムの課題や変化
- ・受け入れる側（巡行先の地域）の信仰面、娯楽面などでの重要性の変化や一貫性
- ・専門芸能者の宿泊や食事の世話を中心的に受け入れるヤドの存在とその変化
- ・巡行地域の祭りや芸能（とくに民謡やわらべうたの歌詞や旋律、祭り囃子の旋律など）への影響関係
- ・無形文化財、無形文化遺産などの概念が専門集団に与えた影響

3. 研究の方法

伊勢大神楽に関しては、現在でも家々での巡行活動が行われているため、「回檀」(巡行)への同行を主な調査方法とした。また、回檀先の地域住民へのインタビューや、当該地域の祭礼の調査も並行して行うことで、住民側が年中行事のなかでどのように伊勢大神楽を迎え入れているかを明らかにした。また市町村誌、地域誌における伊勢大神楽関連記述を網羅的に調査し、外部から地域を訪ねてくる専門芸能集団の記憶や記録がどのように形成されているかを検討した。神楽師側の調査としては、森本忠太夫家に残された近現代の出納帳の資料調査を行った。そのほか、戦前からの古写真の整理と、それらに関する聞き取りを行った。平成に廃業した神楽社中の家族へのインタビュー調査も実施することで、戦後の価値観の変化に関する見解を得ることができた。

その他、徳島県の阿波箱廻し保存会の巡行や、三重県四日市市の獅子舞の家廻り、東北地方における大神楽系・権現舞系の獅子舞などによる家廻り行事の国内現地調査も多数行い、伊勢大神楽と比較検討した。

韓国芸能に関しては、門付けを行う専門芸能集団が現存しないため、主にインタビュー記録資料のリストアップと読み込み、新聞等の文献調査を行ったほか、地域の人々によって行われる旧正月の農楽の家廻り行事調査を行った。また、現地の民俗学・音楽学研究者と意見交換を頻繁に行い、農楽の実演家を日本に招いて研究会を行った。

4. 研究成果

2020年からの新型コロナウイルスの流行により、調査・研究が円滑でない期間があったが、その後延長したことにより日本と韓国の様々な門付け芸能および家々を巡って行われる民俗行事について広く研究することができた。とくに伊勢大神楽の回檀の現状の重点的な調査や文献調査を重ねた結果、近現代での変化について、様々な課題が浮かび上がった。

まず、芸能者側の大きな変化には、担い手の継承の問題が挙げられる。例えば伊勢大神楽の場合、神楽の中心となる太夫家に跡継ぎがおらず廃業する社中が多く見られた。とくに第二次世界大戦と、その後の高度経済成長の影響は大きく、大神楽という職業を続ける選択をしない家元が出てくるようになった。それまでは各社中とも婿養子や、養子縁組によって番頭を太夫にする形で継承してきたが、戦後は養子の制度自体も難しくなり、現在も太夫の継承が大きな課題となっている。社家の中心となる太夫だけでなく、子方と呼ばれるその他の神楽師の出自にも変化が見られた。これについては、森本忠太夫社中の出納帳に関する研究にからめて学会発表を行い、現在、報告書の出版を予定している。

同時におさえおかなければならないのが、伊勢大神楽社中の「ニセモノ」の台頭に関する問題であった。戦後に廃業した社中が多かったため、その太夫名を名乗る複数の新規団体がその回檀地に入り込んで、初穂料のとりあいのような状態になり、回檀地が「荒らされた」という口述

や地域誌の記録を多数見つけることができた。この問題については雑誌論文やエッセイ、口頭発表等で問題提起を行ってきたが、今後の研究の大きな焦点となる主題を見出すことができた。新規団体との攻防戦と並行して、文化財保護制度によって価値づけが行われたことも、近代における大きな変化であることが浮き彫りになった。

一方、回檀地域の住民側の変化には次のようなことが挙げられる。第一に、地域社会（とくに寺社の氏子、檀家組織など）の連帯力の薄まりや、少子高齢化が甚だしく、地域で迎える際に最も影響力があり中心的な役割をしてきた庄屋などの権力者が弱体化したことによって、専門芸能者の受け入れ方にも大きな影響があったことは明確である。高度経済成長期以降、人々の宗教・民間信仰に対する意識の低下や、娯楽の多様化による門付け芸能の希少性の低下も、門付け芸能の活動に大きなダメージを与えた。加えて、上記のような地域社会の弱体化を通じて、個人の「家」という空間がある程度備え持ってきた「公」的な役割が薄れ、きわめて「私」的な空間へと意識変化が起こり、家に芸能者や宗教者を上げたがらない人が増えた点も見逃せない。とりわけ、芸能者の宿泊や食事を担う「ヤド」の継続が困難となった。伊勢大神楽の場合、個人宅でのヤドが難しくなった後も旅館を転々としながら旅の生活を続けてきたが、近年では旅館も廃業するケースが多くなり、持ち家や借家から出勤する形に変化している社中も多い。

このように記述すると「衰退」の傾向ばかりが目立つが、地域を回っていた専門集団が廃業した場合に、その姿を懐かしんで自分たちでそのまねごとを演じる事例が全国的に見られた。とくに福井県の伊勢大神楽系統の獅子舞団体の調査を通じて、地域住民が憧れや尊敬の念を持って接してきた伊勢大神楽の記憶を、自分たちの体で伝えていることについて話を聞くことが出来た。ほかにも市町村誌の調査を通じて、過去に来ていた神楽のイメージが、わらべうたや地域の民話に残されているケースを多数発見することが出来た。

伊勢大神楽に関しては、変化した部分ばかりでなく、今でも毎年、決まった時期に決まった地域で回檀や総舞が行われている地区も少なくない。地域住民が伊勢大神楽の獅子舞や、獅子頭に対する畏敬の念、そして強い愛着を持って待ち望んでいることを、様々なインタビューで聞き取ることができた。伊勢大神楽の笛や獅子が地域の祭りに取り入れられるなどの現象も、現在でも起き続けているということもわかった。伊勢大神楽と地域の民俗文化の関係性については、まだまだ研究の余地が多く残されているといえる。

・研究成果の学術的発信

以上のような研究成果については、別紙のとおり日本・韓国での共著出版や多数の学会発表を通じて発表し、現在は大阪大学出版会からの書籍と、国立民族学博物館の報告書の出版を準備中である。

研究論文や学会発表のほかに、本研究を通じて発表した最も大きな成果物のひとつは、国立民族学博物館で申請者が監修責任者となり制作した伊勢大神楽についての映像民族誌「それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌～」である。本作品では、2020年以降のコロナ禍においてもなお、旅を続ける山本源太夫社中の神楽師たちと、彼らを迎える地域の人々の関係性を、研究者の視点から描いた（参考：[国立民族学博物館ホームページ](#)）。本作品は2021年に撮影を行い、2022年3月の完成以降、大阪府松原市民松原図書館、大阪府立図書館、大阪市十三シアターセブン、宮城県仙台市、東中野ポレポレ座、東京ドキュメンタリー映画祭等での上映を多数行い、神楽師との対談などの場も設けた。研究成果の還元にとどまらず、大阪での上映に際しては観客のなかに伊勢大神楽を迎えてきた人々も含まれており、アンケート等のフィードバックにより新たな研究資料や意見を得ることもできたことは非常に意義深いことであった。

・公演、展示等を通じた社会還元

韓国晋州市世界仮面劇ピエンナーレでの伊勢大神楽公演（2019年）、国立民族学博物館での伊勢大神楽ワークショップ（2019年）、韓国国立民俗博物館特別展「MASK - 仮面の日常、仮面劇の理想」への伊勢大神楽獅子頭貸出コーディネートおよび映像提供（2023年10月24日～2024年3月3日）など、研究者の立場から様々な形で伊勢大神楽の紹介を行ってきた。そのほか、テレビ番組や新聞取材への協力も多数行った（NHK教育番組、WOWOW、高岡ケーブルテレビ等）。伊勢大神楽だけでなく、韓国農楽についても、日本での公演およびワークショップ等の開催を重ねることで、研究成果を一般市民に還元することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 神野知恵	4. 巻 182
2. 論文標題 マウルクッは生きている 韓国全羅道の村祭りの現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 68,73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神野知恵	4. 巻 29
2. 論文標題 コロナ状況下の日本で伊勢大神楽を撮る	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Field Plus	6. 最初と最後の頁 10,11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神野知恵	4. 巻 45(1)
2. 論文標題 それでも、獅子は旅を続ける：伊勢大神楽の回禮の記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 83,93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神野知恵	4. 巻 14
2. 論文標題 「滋賀県の市町村誌に見られる伊勢大神楽関連記事の傾向」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 139-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 神野知恵	4. 巻 43-3
2. 論文標題 韓国音楽学者李輔亨による湖南右道農楽録音資料の比較考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 443,483
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 島嶼海岸地域における巡回芸能集団伊勢大神楽の活動 (韓国語)
3. 学会等名 木浦大学島嶼文化研究所セミナー (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽をモチーフとしたわらべうたの伝承
3. 学会等名 東洋音楽学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Chie Kamino
2. 発表標題 Traveling performing arts: Enjoying comedy and exquisite skills of performance : Laughter and acrobatics by Itinerant Performers of the Ise-Daikagura
3. 学会等名 AY2022 The 5th Lifelong Sciences International seminar
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 神野知恵、吉田ゆか子、鏡味味千代
2. 発表標題 映画「それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌～」を観る + 太神楽曲芸実演
3. 学会等名 東京外国語大学AA研 人類学カフェ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽と コロナ禍の日本を歩く
3. 学会等名 AA研コロキアム「コロナ×フィールド座談会：コロナ状況下のフィールドとフィールドワーカー（招待講演）」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 みんなばく村に神楽がやって来る！ 伊勢大神楽ワークショップの記録
3. 学会等名 東洋音楽学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 旅を続ける伊勢大神楽 コロナ禍での活動状況
3. 学会等名 早稲田大学人間総合研究センターシンポジウム「ポストコロナの祝祭を考える 伝統、ヴァーチャル、「生感」」（招待講演）」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 大正・昭和の旅する神楽師たちの暮らし～伊勢大神楽講社森本忠太夫社中の出納帳の分析研究
3. 学会等名 東洋音楽学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 民俗芸能をつなぐ/ 民俗芸能研究をつなぐ
3. 学会等名 民俗芸能学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 くらしと折りと芸能 - 家を廻る民俗芸能から学んだこと -
3. 学会等名 音楽鑑賞振興財団講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 日本の動物仮面による門付けの歴史と芸能の上演形式～伊勢大神楽を中心に～
3. 学会等名 韓国 晋州世界民俗芸術ビエンナーレ仮面劇シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAMINO CHIE (神野知恵)
2. 発表標題 A Documentary Film on Ise-daikagura: A Lion Dance Driving Evil Power from Houses in Japan (悪魔を祓う獅子 - 伊勢大神楽の映像発表)
3. 学会等名 国際伝統音楽学会 (ICTM) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 家々を訪ねる仮面芸能と地域社会 日本の東北地方に伝わる浦浜念仏剣舞を中心に
3. 学会等名 韓国 安東仮面劇フェスティバル仮面劇シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 韓国 高敞農楽保存会が高敞の地域農楽と歩んできた道～旧正月行事の伝承教育を中心に～
3. 学会等名 高敞農楽シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 くらしと祈りと芸能 - 家を廻る民俗芸能から学んだこと -
3. 学会等名 国際基督教大学宗教音楽センター公開講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 家廻り行事を通じて伝達される<地域知> - 日本と韓国の事例より
3. 学会等名 地域研究コンソーシアム年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽の回槽における笛の機能
3. 学会等名 東洋音楽学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽の回槽における笛の機能
3. 学会等名 民俗芸能学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 伊勢大神楽と地域環境が生み出すサウンドスケープ
3. 学会等名 カワイサウンド技術・音楽振興財団 第37回研究助成講演会発表(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 日本の島嶼地域の民俗－韓日比較研究の可能性
3. 学会等名 南道民俗学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神野知恵
2. 発表標題 「家廻り芸能はなぜなくなるのか 伊勢大神楽の神楽師の多重的価値観からの考察」
3. 学会等名 国立民族学博物館研究懇談会（内部研究会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 野村伸一ほか編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 301
3. 書名 能楽の源流を東アジアに問う 多田富雄『望恨歌』から世阿弥以前へ	

1. 著者名 金子亜美、小倉志保穂、神野知恵、田中有紀、井上さゆり	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 88
3. 書名 アジアを学ぼうブックレットシリーズ 音楽を研究する楽しみ 出会う、はまる、見えてくる	

1. 著者名 ナ・スンマンほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 民俗苑	5. 総ページ数 718
3. 書名 島と海の民俗研究、その行路と展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------